

# LOVE'S LABOUR'S LOST に於ける學問と教師とに 對する諷刺

中 村 六 男 \*

Mutsuo NAKAMURA : Shakespeare's Satire on Learning and Pedantry in *Love's Labour's Lost*

## I

'Shakespeare の極めて初期の作品 (執筆 1593~4,<sup>(1)</sup> 出版 1598) で學者に依つては彼の戯曲では処女作である  
とさえ云われている *Love's Labour's Lost* は諷刺劇である。  
勿論諷刺の血脈が力強く通つている戯曲はこの作品  
に限つたわけではなく、彼の他の作品にも一般に考えら  
れている以上に認めることが出来るのであるが、この戯  
曲の様にその主な特徴が諷刺にあるものは他にはないの  
である。この戯曲は一般の觀客の為に書かれたものでは  
なく、宮廷人のために、或は J. D. Wilson の云う様に  
the Earl of Southampton の私邸で演出するために、  
或は M. C. Bradbrook<sup>(2)</sup> や F. A. Yates<sup>(3)</sup> の説く様に  
Oxford や Cambridge の卒業者を教育する所謂 'The  
'third University' であつた London の the Inns of  
'Court の学徒達の為に書かれたものであると種々様々に  
云われている。とにかくこの戯曲は当時の知識人を目標  
として書かれ、彼の作品では最初に上演されたものでは  
あると考へて間違はない様である。それならばこの特殊な  
諷刺劇はどの様な内容を持つた戯曲であるのだろうか。  
先ずその概梗を述べよう。

第一幕、第一場。Navarre 王 Ferdinand は待從の  
貴族三名 Berowne, Longaville, Dumain と共に彼の  
宮廷を一種の academe として、其処で三年間世間との  
一切の交渉を断つて學問に専念することにする。其間  
は愛とか富とか華美なることなどは一切避けねばなら  
ないのであるが、更に宮廷は全くの女人禁制、而も一週間に  
一日は断食、食事は一日一回、睡眠は一日三時間、居眠  
嚴禁、と云うきつい生活をすることを誓言する。同時に  
嚴重な勅令を發して女が宮廷に近寄ることを禁じ、又  
男が女と話し合うことすらも禁ずる。Berowne のみは  
その余りに苛酷なるを驚き且つなじるのであるが既に宣  
誓をしてつた後なので今更取りかえしがつかず、止む

なく王と行動を共にすることを決意する。其処へ阿呆者  
の Costard が巡査の Dull に連れられて来る。彼は田  
舎娘である Jaquenetta と宮廷の park で邂逅して居る  
所を fanatastical Spaniard で宮廷に仕えている Don  
Adriano de Armado に見付かり、巡査の Dull に引渡  
されたのであつた。Dull は Costard の罪状を述べる  
Armado からの手紙を持つて王の許に Costard を引き  
立てて來たのであつた。王は Costard を一週間獄と水  
だけで断食をする様にと罰を云い渡す。

第二場。Armado は彼の小姓で才氣に満ちた Moth  
に近頃自分が癡癡になつた事、三年間學問に専念するこ  
とを王に約束した事などを話す。其等のことに対して、  
Moth はなかなか氣の利いた wit と puns を以つて応  
對する。更に Armado は近頃恋に陥つたことをも語る。  
それに対しても Moth は wit を愉快にとぼす。遂に  
Armado は恋の相手は Jaquenetta であることを打ちあ  
ける。恰度其処へ Dull が Costard と Jaquenetta と  
を連れて来る。Dull は王からの Costard に対する罰を  
Armado に伝え、Costard は Armado の許に監禁され  
て一週間断食することになる。Jaquenetta は dairymaid  
として働くことを許されたことをも Dull は Armado に  
伝える。Armado は Jaquenetta に彼女を恋している  
と打ち明ける。彼女はそれを本氣にしない。Dull が  
Jaquenetta を連れ去つた後恋の敵とも云える Costard  
をひどく罰してやらうと云う。Moth に命じて彼を連去  
らせ、牢に入れさせる。独りになつた Armado は独白を  
する。Jaquenetta と云う身分の卑しい田舎娘を愛するこ  
とに依つて國王との約束を違え、誓言を破つて虚偽を立  
證することの苦惱を述べる。併し恋には勝てぬ。武人と  
しての彼も愛の為に勇氣も劍も捨ててゐる氣になる。そし  
て恋の sonnet を作ろうと云う。

第二幕、第一場。フランス王女が扈從の三人の女官  
Maria, Katharine 及び Rosaline、待從の貴族 Boyet や  
其他の者、隨行者達を従えて Navarre 王の宮廷を訪れ  
る。王女は Aquitaine に関する重大な國事を Navarre

\* 信州大学繊維学部英語研究室

王と交渉する為に Navarre に来つたのであつた。併しフランス王女は来訪の途上王が学問専念の為に三年間宮廷に女人禁制の勅令を公布したとの噂をきき、王との面談の困難なることを懸念する。其処でまず Boyet に命じて予備交渉に当らせる。其間三人の女官と王の宣旨仲間の三人の貴族の噂を始める。Maria は Longaville を、Katharine は Dumain を、Rosaline は Berowne を、それぞれ知つて居つて、互にその知つて居る相手を褒めたたえる。王女は三人の女官が三人の貴族をそれぞれ既に恋しているのではないかと驚く。やがて Boyet が帰つて来て、王は既に王女が国事の交渉に来たことを知つて居り、王及び貴族達も会談の覚悟をして居るが、王城には入らせないで門外の野原にて面会をするつもりで居ると王女に報告する。其処へ王の一行がやつて来る。Navarre 王とフランス王女は機智に富んだ会話を皮切りに Aquitaine にかかわる会談を始める。併し其日の会談では交渉はまともならず、翌日へと延期になる。王は王女を宮廷に招いてとめることは出来ないが、門外の原にしつらつた幕屋で充分に款待する旨を告げて立去る。Berowne, Dumain, Longaville はそれぞれ相手の女官の名を Boyet に尋ねるが、Boyet は機智に富んだ応答をしてその名をあかさない。Navarre 王の仲間が帰つて後 Boyet は王女や女官達と話をする。彼は Navarre 王がフランス王女の実貌にすっかり惚れ込んで了つて居るなどと王女に告げる。やがて王女一行は幕屋に引きあげる。

第三幕、第一場。Armadoと彼の小姓 Moth とは恋愛について語る。Moth は子供のくせにそれについて種々様々なことを述べ立てるが、それは観察に依つて知つた所であると言う。そして Jaquenetta に惚れ込んだ Armado をやじる。Armado は Moth に命じて阿呆者の Costard を牢より連れ出させ、彼を自由な身にしてやる。併しその代りに Jaquenetta へ恋文を持つて行く様にと頼む。それで報酬として 3 farthings を与える。Armado と Moth とが立去つた後 Costard は貰つた報酬をよこんでいる。其処へ Berowne がやつて来る。彼も亦 Costard にフランス王女がその日の午後王宮の park で狩をすることになつて居るが、その時にその附添えをしている Rosaline に恋文を手渡してくれと頼む。Costard は Berowne から報酬として貰つた 12ペンスをよこさながら立去る。Berowne は長々と Rosaline に対する恋の独白をする。

第四幕、第一場。王女, Maria, Katharine, Rosaline,

貴族達、扈從者達、及び獵場番人が王女歓迎の為に催された鹿狩に来る。王女は小薔の蔭に設けられた台の上より走つて来る鹿を弓で射止めることになつて居る。その台へ獵場番人に案内されて行く途中で王女は阿呆者の Costard に逢う。Costard は Berowne より Rosaline へ手紙を頼まれて来た王女に告げる。そして手紙を王女に渡すが、その手紙は Armado より Jaquenetta へ渡してくれと頼まれた恋文であつた。それを間違えて渡して了う。王女はその誇張に満ちた奇妙な文体で書かれた Armado の恋文を Boyet に命じて皆の者に読み聴かせる。Costard はなほもその手紙は Berowne より Rosaline に渡してくれと頼まれた手紙であると言張るので、王女はそれを Rosaline へ手渡して從者達と共に立去る。後に残つた Rosaline, Boyet, Maria, Katharine は Costard を含めて相当に卑猥な意味を持つた puns や quibbles や wits を用いて随分と露骨な口台戦をやる。彼等の退去した後 Costard は Boyet, Armado 及び Moth に就いて独白をやる。

第二場。校長の Holofernes, 牧師補の Nathaniel 及び巡査の Dull がフランス王女が射止めた鹿について話している。Holofernes は如何にも學術的にイタリー語くずれの Latin を盛に用いて Dull の無学を蔑む。詔者の Nathaniel がこれに即する。Dull は負けなつもりで Holofernes に譏をかける。Holofernes はそれを解いて更に一層 Dull の無学を蔑む。Holofernes は王女の鹿狩について即興の詩を作る。無闇矢鱈に頭韻を押した奇妙なくだらない詩である。Nathaniel はその詩に対して絶大な讃辭を使つてほめる。Holofernes は如何にも得意になつて、自分の様な詩才にたけた大先生の下では教会区の子供は何等教育に不自由は感じはしないのだと大いに威張る。其処へ Jaquenetta と Costard がやつて来る。Jaquenetta は Costard が持つて来た Armado からよこしたと云う手紙を Nathaniel に読んで貰う。その手紙は Berowne から Rosaline にやつた恋の sonnet であつて、それを阿呆者の Costard が間違えて Jaquenetta に渡つて了つたのである。その詩は Alexandrine verse で書かれた相当な詩であつたのであるが、詩才の欠けた Holofernes は如何にも大層らしくその詩を酷評する。Jaquenetta は外国の女王 (strange queen) の貴族の一人である Berowne と云う人から彼女によこした手紙であると云う。Holofernes はその手紙の sign などを調べて、それは王と学問のために誓を立てた仲間の一人の Berowne の恋文であること

を発見し、事の重大なるに驚き、直にその手紙をJaquenettaに命じて王に届けさせる。彼女はCostardを連れて立去る。Holofernesは先生の特権として教え子の家に御馳走になりに出掛けようとする。Nathanielを連れて行つて御馳走仲間にしてやろう、序にDullをもその食事に招待しようとする。そして其席でBerowneの詩がくだらない詩であることを證明してやろうと云いながら二人を連れ去る。

第三場。Berowneが恋のsonnetを書いた紙を持つて現われ、Rosalineを恋してすっかり憂鬱になつてしまつたことを独白する。もうこうなつたからには他の三人が来ても構わないと云う。其処へ恰度王が恋のsonnetを書いた紙を持つてやつて来る。Berowneは樹に登つて枝間に隠れる。王はBerowneが樹上から見ているのに気付かず、王女に対する恋の詩を読む。すると次に、Longavilleも亦恋のsonnetを書いた数枚の紙を手にしながら現われる。王はこつそりと籬蔭に隠れて窺う。Longavilleも亦Mariaに対する恋のsonnetを読む。其処へ今度はDumainが同様にCatharineに対する恋のsonnetを書いた紙を手にしながらやつて来る。Longavilleも傍に隠れて彼を見守る。DumainはCatharineの美しさを賞讃した後その恋の詩を読む。そして王も、BerowneもLongavilleも恋に陥つて居れば自分だけが誓を破つたことにならないからいいとそれを希望する。するとLongavilleが現われ出てDumainをなじる。それを見て王が現われ、Longaville及びDumainを責め、あの様に熱誠をこめて誓つた誓言をかくも無闇に破つたことをBerowneが聞いたならばどの様に蔑み罵るであらうかと云う。其時Berowneが枝の間から現われて、王を始め他の二人を猛烈になじり責める。そして自分こそ正直者で誓を守つて来た唯一人であるとする。そして急いで立去ろうとする恰度其処へJaquenettaとCostardがBerowneからRosaline宛の例の恋文を持つて来て王に提出する。王はそれをBerowneに読めと命ずる。Berowneはその手紙を引裂いて了う。Dumainはその破られた手紙を拾ひ集めて、それはBerowneからの手紙であるとする。Jaquenetta及びCostardを罵り退去させた後、Berowneは遂に自白する。そして自らの恋人Rosalineを絶賛する。すると王は王女を讚美し、他の二人も各自の恋人を褒めたたえる。四人は各々自らの恋人を誇大な言葉を用いて自慢し合い、他の恋人を貶し合う。併しやがて各人は皆誓を破つて了つたことに気付く。王はBerowneに彼等が恋をすることは決して彼

等が立てた規則を犯すものではなく、又誠に背くものでもない事を證明してくれと頼む。其処でBerowneは恋愛讚美の長辯舌を振る。各人はこれより大いに恋人達を楽しませて、求婚に突進しようとする。云合つて立去る。

第五幕、第一場。Holofernes、Nathaniel及びDullが登場するが、Nathanielは例の如く詔つて、Holofernesが生徒の家での御馳走の席で述べた言葉を口を極めて褒める。Nathanielは下手なラテン語を時々使っているのであるが、その間違をHolofernesは指摘して無闇に偉そうにラテン語を使つてArmadoの人物の批評などをする。其処へArmadoがMothとCostardとを連れてやつて来る。HolofernesとArmadoとは如何にも尊大ぶつた挨拶を交す。その二人は話を始めるのであるがMothは盛にHolofernesをwitを用いてからかう。Costardも口をはさむ。ArmadoはHolofernesが校長であることを知つて、非常に尊大振つた妙な云廻しをしながら、王女を款待する余興をやる様にと王から命ぜられたのであるが、その援助をしてくれとHolofernesとNathanielとに頼む。Holofernesは早速明けてNine Worthies（九英雄）のpageantを王女の前で演ずる様にとすすめ、その役割を皆にふりあてる。

第二場。王女、Maria、Katharine及びRosalineが登場し、王女は王から恋の印の贈物を沢山受け、恋の詩も送られたと云う。CatharineがRosalineをdark lady（色黒淑女）と云つたことから両者は機智を用いて互に口合戦をする。王女は淑女達に何か恋人から貰つたかと尋ねる。RosalineはBerowneから恋の印の贈物と恋の詩を送られたと云い、CatharineはDumainより手袋と非常に多くの恋の詩を受けたといい、MariaはLongavilleから非常に長い恋文と真珠の鎖を贈られたと云う。彼女等は皆おかしがる。そして才人が恋に溺れた程馬鹿らしく可笑しいものはないと云う。其処へBoyettが急いでやつて来て、王と紳士達がロシア人の仮装をしMothを先払いとして、彼女達と会談をし、求婚をし、ダンスをしにやつて来ると告げる。王女は各人皆仮面をつけ、王や紳士達から贈られた恋の印の贈物をお互に取換えて身に付ける様にと云う。そうすれば彼等は恋の印の贈物を目当てに云寄るであらうから間違つた人をその相手にするであらうと云う。そして王女は王からの贈物をRosalineにつけさせ、自らはBerowneからRosalineへの贈物をつける。KatharineとMariaも各自の恋人よりの贈物を交換して身につける。王や紳士達はからかい気分の余興として仮装して来るのであるから、次の機会

に仮面を取りはずして逢つた時に彼等が各自の恋人と間違ひてもらした秘密を互に暴露して大いに嘲笑してやろう、併しダンスをしてはならないと王女は淑女達に云う。王女や淑女達が仮面をつけた時、喇叭がなり、黒人達が音楽を奏し、Moth が先触れ口上を手にし、王及び紳士達がロシア人の仮装と仮面とをつけてやつて来る。これより仮面劇が始まる。Moth が先触れ口上を始めると王女や淑女達は彼に背を向けて了う。又 Boyet が彼をからかう。Moth はその為にすっかり口上をかき乱されて、しどろもどろになつて大失敗に終り、Berowne に叱られて立去る。王及紳士達はダンスを要求するが拒まれる。各々別々に王と Rosaline, Berowne と王女, Dumain と Maria, Longaville と Katharine とは密談をする。そして王及び紳士達は王女や淑女達にすっかり愚弄されて楽士の黒人達を通して退却する。Boyet は王及び紳士達はその企図が大失敗に帰して了つたので仮装をすてて再び求婚をしに来るであらうから、仮面を脱ぎ、恋の印の贈物をもと通りに取換えた方がよいと云う。今度逢つたならばロシア人の仮装をして来た者共を大いに嘲笑してやろうと云い、王女や淑女達は太急ぎで幕屋に引き上げる。王, Berowne, Longaville, Dumain は彼等の本来の服装で再び来る。王は Boyet に王女や淑女を呼びに行かせる。Berowne は Boyet と云う人物を批評する。王は Moth の口上をすっかり混乱させて了つた Boyet の悪口を述べる。其処へ Boyet の案内で王女, Rosaline, Maria, Katharine が従者を従いて再び来る。王は王女一行を宮廷に案内しようとする。所が王女は王の誓を破る原因となることは嫌であるから相変らず野原に留ると云い張る。野原でも結構である。つい先程もロシア人達が彼女達を訪れて面白かつたと淑女達は語る。王はそのロシア人達が王と紳士達とであつたことが彼女達に既に知られて居つたことに気がついて、気が遠くなりそうになる。Berowne は今後は一切の虚飾を捨て、卒直な言葉で求婚しようとする。王及び紳士達はさきに女人禁制の誓を破り、今また仮装をしていた時に間違つた相手に求婚して誓つた宣誓を破らねばならないと云うさんざんな窮境に陥る。Berowne は Boyet の計略にかかつてこの様なひどい目にあつたことを見抜き、すっかり降参する。其処へ Costard が来て、Nine Worthies (九英雄) の pageant を余興としてやろうと思ふがどうかと尋ねる。王は彼等の仮装劇だけで恥はもう沢山で、この上くだらない Worthies の pageant で恥の上塗はごめんであると云う。併し王女は熱心の余り、う

まく表現出来ない pageant に却つてなかなか面白味があるから pageant をやつてもらいたいと云う。其処で珍妙な Worthies の pageant が Costard, Nathaniel, Holofernes, Moth, Armado に依つて演ぜられるのであるが、皆の者からさんざん貶され、挙句の果ては pageant の最中に Armado と Costard が Jaquenetta に出来た子供の事で大喧嘩をすると云う有様である。其時突然 Marcade と云う使者が来てフランス王の崩御の訃音を伝える。王は余興の Worthies を演じている連中に退去を命ずる。今迄の喜劇的雰囲気は一変して嚴肅なものになる。王女は王に対して今迄の反抗的な嘲笑的な態度を詫び、国事の要求事項を許容してくれたことを感謝し、其度急遽フランスへ帰らねばならぬと云う。王や紳士達は今迄とつた行動の理由を説明し、真面目になつて更に求婚する。すると王女は王に対して、直に何処か見る影もなく荒れ果てた人里離れた此の世の娯楽のない愚者の庵に行き、一年間霜や飢餓やつらい寝泊に堪え、うすい着物を着て過して後もなほ彼女への愛が変わらないならば、求婚に応じよう、其間自らは父王に対する喪に服して父王をしのんで泣いていようと云う。王は必ず王女の要求通り実行しようとする。Katharine は Dumain に対して道徳と健康と正直とを要求の条件とし、12カ月と1日後に王が王女の許に来る時に王に随つて来て求婚する様にと云う。Maria は Longaville に喪のあける一年間を待つようにと要求する。Rosaline は Berowne に対して、12カ月間毎日日のきけない病人を訪れて、呻く哀れな人々を見舞い、話をし、機智の全力を傾けて苦しんでいる人々を笑わせてやることを要求し、もしそれを実行したならば求婚に応じようとする。其処へ Armado が再び来て、彼は Jaquenetta の為に三年間鋤を取ることを誓つたと云う。そして彼等の演じた pageant の終にやる予定であつた最と郭公鳥をたたえる歌をうたわせてくれる様に王に願う。王が許したので Holofernes, Nathaniel, Moth, Costard, 其他の連中も来て冬と春とに別れ、冬は最を代表し、春は郭公鳥を代表し、互に合唱し合つてこの劇は終ることになる。

## II

以上の梗概から吾々はこの戯曲の構造と話の筋とを知り得るのであるが、構造としても決してこれと云つて巧妙な所を認めることは出来ないし又劇全体の組立は寧ろ拙劣と云わなければなるまい。又話の筋としては登上人物の動きが少なく、変化も乏しくて、筋による面白味を

欠いている。更に登上人物と云う点から見ても Navarre 王, Berowne, Dumain, Longavilleに对照させてフランス王女, Rosaline, Katharine, Maria と配置させ、又 Armado に対して Jaquenetta, Holofernes 及び Nathaniel に対して Moth 及び Costard などを対照させて所謂一種の左右相対的な均齊を保っている。其故に筋の単純さは人物配置の単純さに依つて益々平凡なものになつてゐる。其等人物の性格としても Berowne, Holofernes 及び Moth に僅かに見るべきものがあるだけで、其他は全部その特徴が殆ど同じで、たとえ上品下品の差はあるにしても、生命を持たない一種のロボットに過ぎないと云つても過言では殆どなからう。更に又この戯曲は卑猥な冗談など多く、特に第四幕第一場の終りの部分の様に淑女達までも平気でそれを話し合う。こうした理由から従來この戯曲の批評は余り芳しくなかつたのである。例へば F. E. Halliday の集録した批評集<sup>(6)</sup>を見ると、Johnson の評も余りよくない。たとえ Coleridge はこの作品に Shakespeare と云う天才の萌芽を認め、其他言葉などにその特徴を注視し、又

I can never sufficiently admire the wonderful activity of thought throughout the whole of the first scene of the play, rendered natural, as it is, by the choice of the characters, and the whimsical determination on which the drama is founded………とほめてはいるが、Hazlitt の如きは、

If we were to part with any of the author's comedies, it should be this.

と云う有名な言葉を用いて Shakespeare の喜劇中では、見るべき登場人物が有るには有るが、やつぱりこの喜劇が一番駄作であると云つて居る。更にまた The Henry Irving Shakespeare 中の批評を見ると、

Love's Labours Lost whether we consider it as a drama, or as a study of character, or as a poetical work, is certainly the least to be admired of all his plays.

と Shakespeare の戯曲中では最も拙作であると云い、又、

There is scarcely one scene which contains any real dramatic interest………

………but in this play no one who reads it, or who sees it acted, can care very much about the fate of any character in it. None of the female characters are developed sufficiently to enlist our sympathies; while the male ones produce, for

the most part, only a sense of weariness in the reader or spectator. The individuality of each character is slight………

The end of the play is, to an audience, eminently unsatisfactory; no definite result is attained, and the spectator is simply left to imagine that, in the course of a year or so, the various couples, male and female, are joined together in holy matrimony …………

The comic element is infinitely weaker.

と評している。其故に戯曲としてはどう見ても立派な作品と云うわけにはいかなくなる。

然るに今頃はこの戯曲が相当に見直される様になつて來た。F. E. Halliday の批評集に載録されている Walter Pater の Appreciations 中の言葉には、

As happens with every true dramatists, Shakespeare is for the most part hidden behind the persons of his creation. Yet there are certain of his characters in which we feel that there is something of self-portraiture. ……… Biron, in Love's Labour's Lost, is perhaps the most striking member of this group. In this character, which is never quite in touch, never quite on a perfect level of understanding, with the other persons of the play, we see, perhaps, a reflex of Shakespeare himself, when he has just become able to stand aside from and estimate the first period of his poetry.

とあり、この戯曲の Berowne に詩人として若かつた頃の Shakespeare の自画像を認めている。

更に T. M. Parrot も<sup>(7)</sup>

There is, finally, a special reason for the attraction Love's Labour's Lost exerts upon all lovers of Shakespeare. It is that here, for the first time, he seems to draw aside the veil that conceals his inmost self and to present, as he was later to do in the Sonnets, Hamlet, and The Tempest, something that might be likened to a painter's self-portrait... Shakespeare was not trying to draw a portrait of himself in the costume of Berowne. On the contrary this character seems to express what Shakespeare wished to be....

Rosaline's description of her lover voices Shakespeare's secret longing:

but a merrier man  
 Within the limt of becoming mirth,  
 I never spent an hour's talk withal.  
 His eye begets occasion for his wit;  
 For every object that the one doth catch  
 The other turns to a mirth-moving jest,  
 Which his fair tongue, conceit's expositor,  
 Delivers in such apt and gracious words,  
 That aged ears play truant at his tales,  
 And younger hearings are quite ravished;

(11, i, 66-75)

And a man's aspiration often reveals a true portrait of his inner self. And that is the special characteristic of *Love's Labour's Lost*; it reveals, as no other early play does, the promise and to some extent the personality of William Shakespeare.

と Berowne にこそ Shakespeare が若い頃かくなりたいたいと憧れた人物、即ち彼の心内の自己の画像を見、かつ彼の前途の或程度の人格を見ることが出来ると述べている。

以上の様な観点からもこの戯曲は興味を持たれる様になつて来たことも事実であるが、又同時に Walter Pater が 'foppery of delicate language', と云う程に巧妙な言葉の駆使をこの戯曲は含んで居る。H. Granville-Barker もやはり (Halliday の批評集に依る) ,

The early plays abound, besides, in elaborate embroidery of language done for its own sake. This was a fashionable literary exercise and Shakespeare was an adept at it. To many young poets of the time their language was a new-found wonder; its very handling gave them pleasure.

と *Prefaces* に於て Shakespeare の初期の作品の特徴と当時の若い詩人達の風潮を説き、これに続けてこの戯曲の言葉を説明している。この様に言葉の観点からも興味を引くのである。更に此の戯曲を言葉の面から主としてその興味を説く学者をあげると、斎藤勇博士が居られる。(8) 更に Cazamian は、

This young man had a very keen sense of the comic and an inexhaustible, almost excessive, flow of words. He was ambitious not only of a popular success, but also of the approval of the wits, even the court wits. Lyly's witty dialogue inspired him, and with a vigour unknown to Lyly he wrote *Love's Labour's Lost*, a fantasy of which the subject and

the style appealed to the most cultured section of the public.

と云つて言葉の面白さが此の戯曲の主な価値の様に述べ、当時のこうした風潮の先端に立とうとして Shakespeare がこの作品を書いたが如く説いている。Allardyce Nicoll<sup>(10)</sup> も亦、

Every Elizabethan poet and prose-writer was a word-creator, one fetching his trophies from the ancient tongues, another unearthing long-forgotten medieval terms, another quarrying in French and Italian mines, still another boldly inventing fresh combinations of sounds to fit fresh concepts. No dictionary fettered words to the shackles of precise meanings; no grammars imposed heavy rules of behaviour. For the poets, no doubt, the excitement was most intense, but all shared in current passion. We have but to think of Costard in *Love's Labour's Lost* ....

と云い、当時の言葉に対する詩人達の一般的風潮を説き *Love's Labour's Lost* をこうした風潮の作品であると述べている。其故にこの戯曲は言葉の観点からこれを研究し且つ味わわなければならないことは明瞭である。こうした観点から研究した学者に B. Ifor Evans が居る。彼は、<sup>(11)</sup>

Something Shakespeare derived from his contemporaries, and more precisely from John Lyly, and he had come to the stage when words were one of the major excitements and adventures of alert and creative minds. So he fell upon a plot, or rather an elegant device, which was cunningly and dramatically maintained, so that language might have the necessary situations for diverse and entertaining employment. It is with words, not with plot and characters that the play lives. They are words sought for their own sake, words dancing to unexpected rhythms, and twisting themselves into fantastic shapes, words robbed from the rhetoricians, and strung out, half-mockingly, into patterns borrowed from the grammarians, with images and conceits already made popular by the sonneteers, and words hand-led lovingly, and placed into new contexts, with a beginning of an awareness of their illimitable power.

とこの戯曲の本質を極めて至当な言葉で表現している。

この様な言葉の面白さと云う点でもこの戯曲は永遠の生命を附与されて居ると云わねばなるまい。

併しながら生命のあるものは複雑なものであつて一面的な本質のみではその生命を維持することは困難である。文学作品と雖もそれが生命のあるものならばやはり相當に複雑な本質があると考えねばなるまい。そこでこの戯曲の面白さとしての言葉と非常に密接な関係があるのではあるが、この戯曲の持つ本質の一つと考え得る諷刺性をも考えなければならない。

### Ⅲ

*Love's Labour's Lost* は諷刺劇であることは本文の冒頭で既に述べた所であるが、此處で諷刺と云うことについて考えて見る。諷刺は形式的に論ずる場合には文学的要素でなくして、文学的モチーフである。其處には知性がなければならない。作者の知性が不合理や暗愚性や異常性を持った対象を照して其等の性質を読者や観者の知性を働かせることに依り察知出来る筋や言葉などに依つて露呈せしむる時に諷刺が発現する。その諷刺が突く諸性質を持たない観者或は読者にはその諷刺は笑を誘發させ、其等の諸性質を帯る者には苦味を感じさせる。其故に諷刺は作者の理性のみ働き、感情とか同情とか対象に働いた場合は諷刺はその姿を消して了う。其處には一種の *humour* と *pathos* とが残る。然らばこうした形式を持った諷刺は如何なる歴史的な過程を経て来たのであろうか。Moulton の説に依つて説明すると、<sup>(12)</sup>

Satire is the comic counterpart of wisdom. Medieval life, in which there was so large a reversion to float-literature, gives us the two types symbolized where some ruler of men appears with the *Spruch-sprecher* on his right hand, and the Fool on his left: the Sayer of Wise Sayings, and the Fool, alike pour out wisdom. The institution of the Court Fool is simply wisdom disguising itself in cap and bells. Even comedy, as Mr. Meredith says, is thoughtful laughter. But in literary evolution pure comedy is the later stage: the earlier stage is always satire. Greek iambic dances, Latin *saturae* or hodge-podge, the mythic dramas of Epicharmus, Aristophanic and great part of Roman comedy, all have their basis in satirical attack; only gradually does the satire take a second place as caricature and pure comedy come to the front. The

realities of life cast grotesque shadows when light of wisdom is thrown upon them: such shadow play is satiric comedy.

とある。睿智の光を現実の生活に照した時にグロテスクな陰を現実が投げる。この陰を表現する劇が諷刺喜劇であると説く。

然らば *realities of life* とは何か。人生の実際とは真理虚偽、合不合理、一時的なもの永遠的なもの、善悪、と云う様な矛盾撞着するものを幾多包含して居るものである。睿智の光や理性の明るさが其善美や合理的なものだけを照してもグロテスクな陰を投ずるものではない。併し Strachey の云う如く、<sup>(13)</sup>

Human beings, no doubt, would cease to be human beings unless they were inconsistent; but the inconsistency of the Elizabethans exceeds the limits permitted to man.

と云う様に人間である限りは人間は必ず矛盾撞着を持っているものである。特にイリザベス朝時代の人々はこの撞着が甚しかつたのである。こうした矛盾撞着を睿智の光が照らした時にグロテスクな陰が投ぜられ、諷刺が生れるのである。

人生の実際はこれを二面に分類して考えることが出来る。一時的な相と永遠的な相とである。一時的な相とは其時代特有なもの、即ち其時代の歴史的な事件、風潮、風俗、習慣、言語、人情、思想、人物と云つた様なその時代を形成する現実面を云うのであつて、それはその時代と共に消え去る事象である。永遠的な相とは現実の中に含まれている人類が存在する限り不変的に続く面である。即ち人間性の不変的な普遍的な相である。睿智が前者の孕む不合理性、異常性、矛盾性、愚鈍性を照した場合に生ずる諷刺は所謂 *topical allusions* を含むことになる。この様な *topical allusions* を多く含む作品はその時代には確かに人気を非常に博するが、時代が過ぎると時代のヴェールに蔽われてその生命を失つて了う。もし興味を喚起とするならば、それは特殊の研究家のみに対してである。之に反して睿智が人間性に内在する普遍的な不変的な矛盾性などを照した場合に生ずる諷刺は何時の時代にも訴えるものになる。所がこの様な面にのみ眼を注ぐ作者は諷刺の本質上同情を働かさず理性のみを使うので、自然人間難いか厭世家になつて了う。而もそうした考えが作品に滲透して行く。吾々は Swift にその好例を見ることが出来る。併し実際の作品は以上述べた二種類の諷刺を多少の相違はあるが通常両者とも兼ねたものである。

諷刺に関して以上のべたことが果して正しいと云えるならば Shakespeare の *Love's Labour's Lost* は何れの諷刺をより多く含むと云うべきであろうか。Edward Dowden<sup>(14)</sup>に依れば、

It is a satirical extravaganza embodying Shakespeare's criticism upon contemporary fashions and foibles in speech, in manners, and in literature. This probably more than any other of the plays of Shakespeare suffers through lapse of time. Fantastical speech, pedantic learning, extravagant love-hyperbole, frigid fervours in poetry, against each of these, with the brightness and vivacity of youth, confident in the success of its cause, Shakespeare directs the light artillery of his wit.

とある通り、何れかと云えば時代的な相に対する諷刺をより多分に含んで居ると云わねばならない。そのため此の戯曲は従来あまり顧られなかつたとも云い得よう。併し近時この戯曲は復活して来た。Richard David<sup>(15)</sup>に依れば、

At the same time a number of revivals on the stage, both professional and amateur, have shown that as entertainment and as drama *Love's Labour's Lost* is still very much alive; the fault is rather too much exuberance—individual characters are lost in the sparkle of quirks and comicalities and personal touches, and the jokes are crammed into the dialogue four deep. Yet this excess of high spirits and invention has its own charm.

と云つてその復活とその理由を述べている。

併しこの戯曲の生命のあるのは前に述べた通り Shakespeareの姿がこの作品にあらわれて居り、又言葉の面白さや彼の中期、後期の諸作品の種が多く含まれて居り、当時の時代的な面に対する諷刺が多分に表現されて居る為ばかりではないと思われる。そうしたものの以外に、当時の topical なものとして捉えた学問と教師、又学者教師達が演ずる気取つた態度に対する諷刺に、やはり人間性に普遍する永遠的なそうしたものの持つ異常性に対する諷刺をも聴き得るのではないだろうか。其他恋愛に対する諷刺なども考えられるのであるが、これから主として学問教師に対する諷刺と云う面を中心として取り上げて論じたいと思う。

#### IV

学問教師に対する諷刺の時代的連関 (topical allusions) に関しては Frances A. Yates の著 *A Study of Love's Labour's Lost* 中で詳細に論じて居る所であつて、この様な方面の研究は真に興味の深いものではあるが、吾々の様な英国人でない者特に私の様な無力不勉強な人間には到底不可能なことである。其故に学問教師それらに附随する気取りと云つたことを人間性に普遍するものとして観るといふ立場から主としてそれらに対するこの作品に表われた諷刺を考えて行きたいと思う。

Navarre王 Ferdinand と三人の貴族 Berowne, Longaville 及び Dumain が学問の為に専念しようとする。その目的は、

King. Let fame, that all hunt after in their lives,  
Live register'd upon our brazen tombs,  
And then grace us in the disgrace of death;  
When, spite of cormorant devouring Time,  
Th' endeavour of this present breath may buy  
That honour which shall bate his scythe's  
keen edge,  
And make us heirs of all eternity.

(I, i, 1—7)

とある様に学問に依つて名声を得、それを真鍮の墓碑に刻み永遠の光榮を得るにあつた。即ち彼等の求めるものは、光榮ある永遠の名声であつて、学問はそれを得る手段であつた。

Therefore, brave conquerors—for so you are,  
That war against your own affections—  
And the huge army of the world's desires  
Our late edict shall strongly stand in force:  
Navarre shall be the wonder of the world;  
Our court shall be a little academe,  
Still and contemplative in living art.

(I, i, 8—14)

とその手段である学問を充分になしとげる方法として一切の愛情一切の世俗的欲望を断切り、Navarreを a little academeとするにあつた。さてこの Navarre に関する歴史的事実とこの戯曲との関係即ち topical reference は一切此处では触れないことにする。劇の場所は Navarre と云うことになつては居るが例に依つて Shakespeare のこの作品も当時の英国を素材として居ることは今更注意するまでもないことである。然らば王及び貴族達



は當時の誰がそのモデルであつたかと云う様な詮索も此處ではやらぬことにする。一体吾々は何の為に學問をするのであろうか、永久なる光榮に満ちた名声の為に學問をするのであろうか。此處に學問に対する諷刺を既に発見することが出来る。そして學問の為に一切の愛情と欲望を斷切ることに現実の世界から遊離した不自然さを見出す。此處にも亦諷刺を聞く。當時一般に信ぜられていた<sup>(16)</sup> the Optimistic Theory に依れば、人間の任務は理性を働かせ、學問を用いて、神の代理である自然の三つの領域即ち自然の法則、各国に共通なる法則及び萬民に共通する人間法を理解することであり、學問とはこれら自然の三大法則を解釈し其理を発見する技術であつた。言葉を換えると、これら自然法則の interpreter である。人間はまず感覺を働かし、更にその感覺の上に抜き出でて、真理を発見しなければならない。即ち人間は魂の能力を正当に使用し、正しき種類の愛を通じて、魂の最も高貴なる部分まで上昇する。これ即ち理解の状態である。魂は更に自己及び特殊事象の理解から所謂 ‘universal understanding’ へと上昇する。これ即ち真理であつて、これが魂の本当の住家である。此處に於て pure intellect である天使と冥合する。この状態に於ては感覺を捨て、又理性の働きも必要なくなる。既に天使と化して居るからである。魂は万事を理解し、一切の迷妄を脱して、純粹なる天上の美の大海を見、それを魂の中に受入れ、感覺では了解出来ない最高の幸福を享受する。學問の目的は神と合一する状態に達する為の真理発見であつた。それ故に學問は実に偉大な力を持つ。

As for art Raleigh is eloquent on the power of education in reinforcing or mitigating the effects of the stars:

But there is nothing, after God's reserved power, that so much setteth this art of influence out of square and rule as education doth: for there are none in the world so wickedly inclined but that a religious instruction and bringing up may fashion anew and reform them; nor any so well disposed whom, the reins being let loose, the continual fellowship and familiarity and the examples of dissolute men may not corrupt and deform.<sup>(7)</sup>

と Tillyard は Raleigh の言葉を引用して、學問の力は星の力即ち運命の力に対抗し得るものであり、神の力に次ぐとも云い得る、この偉大な力をもつ學問を左右する

ものは結局は教育である、よき教育は如何なる惡人と雖も化して善人とする、惡しき教育は如何なる善人と雖も惡しき事柄を教えて惡人と化すると云う當時の一般的な考えを説明している。以上述べた様な當時の學問及び教育に対する通念より、この戯曲の Navarre 王の學問に対する目的を考える時、其處に矛盾を見出し、諷刺を感ずるのである。更に名声目当の學問は現代人の眼から見ても余りに淺はかに見え、やはり諷刺的の気分を感知するのであるが、驕つて學問に従事する吾々の心中を省る時、其處に名声を求める氣持が少しもないと云い得るであらうか。此處に人間性に共通な心理に対する諷刺を感得することが出来ると思う。

Navarre 王と三人の貴族達の academe は、當時 London に盛に流行していた academy の一つであつた the Earl of Northumberland 及び Raleigh 一派が始めた philosophical academy である ‘Schoole of Night’ を諷刺したものと通常云われている。其處では Copernicus 的宇宙觀に基づいて天文学を研究し、数学を研究していたと云われている。即ち自然科学を研究して居たのである。其故に従来からの人間中心の學問ではなく、人間と遊離したものである。従つて人間とは絶縁して一切の愛情と欲望と戦つてこれから脱却して學問に専念しようとするのである。此處にこの新興の學問と旧來の人間中心の學問との衝突を見、諷刺発生の基盤を発見する。現代に於ても自然科学と人文科学との矛盾を吾々は常に感じ、諷刺の素材を発見することが出来る。

王と貴族達は學問をする為に三年間苦行することを誓ひ合う。stoical life をすることを宣誓したのである。其期間は女を見ない。毎週に一日は断食をする。食事は一日に一回食うだけ、夜は三時間眠るのみで昼間も居睡をしない。そして、living in philosophy (I, i, 32) をするのである。この女人禁制に依つて學問に専念することの topical allusions の興味は、當時の限られた才子や宮廷人の觀察には誰を諷刺して居るか想像がついたであらうから、非常に大なるものであつたに違いないが、これもやはり万人に共通な心理状態で、吾々が何か大事をなさんと志す場合に、不自然不合理な禁慾生活に依つてそれを達成しようとする傾向をたどるものである。今度の世界大戦争中に於てもこうした生活を支配者に強られたことを考えてもそれを知ることが出来ると思う。其故に此處にも人間性の弱点に対する諷刺を吾々は発見することが出来ると思う。

以上の様な禁慾的な academic art (エリザベス時代の人には art は learning の意味であつた) よりも人生の直接経験を重ずる主張があつた。Yates の説く所では、これは、

Eliot strongly endorses Nashe's own view that experience of life, even if it be of 'villany', is a better school for writers than an academic training or much book-learning. とある様に Nashe が主張し、Eliot が強く是認した説である。更に Yates は、

If for 'villany' — the term which Eliot and Nashe use to cover direct experience of life — we substitute the word 'love', which in Berowne's vocabulary denotes direct experience through living, the argument of Eliot's speech is immediately seen to be much the same as the argument of *Love's Labour's Lost*.<sup>(20)</sup>

と云つて、次に挙げる作品の箇所の Berowne の言葉にこの思想が表わされていると説く。Berown は王に向つて学問研究と云つても何を研究するのかと尋ね、その研究対象を茶化するのであるが、それは 'villany' の立場からするのである。

Ber. ....

What is the end of study, let me know?

King. Why, that to know which else we should  
not know.

Ber. Things hid and barr'd, you mean, from common sense?

King. Ay, that is study's god-like recompense.

Ber. Come on, then; I will swear to study so,  
To know the thing I am forbid to know;  
As thus, —to study where I well may dine,  
When I to feast expressly am forbid;  
Or study where to meet some mistress fine,  
When mistresses from common sense are hid;  
Or, having sworn too hard a keeping oath,  
Study to break it and not break my troth.  
If study's gain be thus, and this be so,  
Study knows that which yet it doth not know.  
Swear me to this, and I will ne'er say no.

King. These be the stops that hinder study  
quite,

And train our intellects to vain delight.

Ber. Why! all delights are vain, but that most vain,

Which with pain purchas'd doth inherit pain:  
As, painfully to pore upon a book  
To seek the light of truth; while truth the while  
Doth falsely blind the eyesight of his look:  
Light seeking light do light of light beguile:  
So ere you find where light in darkness lies,  
Your light grows dark by losing of your eyes.  
Study me how to please the eye indeed,  
By fixing it upon a fairer eye,  
Who dazzling so, that eye shall be his heed,  
And give him light that it was blinded by.  
Study is like the heaven's glorious sun,  
That will not be deep-search'd with saucy looks;  
Small have continual plodders ever won,  
Save base authority from others' books.  
These earthly godfathers of heaven's lights,  
That give a name to every fixed star,  
Have no more profit of their shining nights  
Than those that walk and wot not what they are.  
Too much to know is to know nought but fame;  
And every godfather can give a name.

King. How well he's read, to reason against  
reading!

(I, i, 55—94)

即ち人生経験換言すれば世の中の實際面から見れば実生活から遊離した学問に没頭して居る者は真理の光にその眼を眩惑されて了つて、世事に疎くなり人生に関する真理を見ることが出来なくなつて了つて云つてゐる。唯々骨を折るばかりで、精々他人の本からくだらぬ出典を得ること以外には何も得るところがないと云うのである。こうした学問は愚行であると考えるのである。

所が 'villany' と云う實際経験を重んずる考えに対して Copernicus の説を奉ずるこれらの学者達は、

Log. ....

The mind shall banquet, though the body pine:  
Fat paunches have lean pats, and dainty bits  
Make rich ribs, but bankrupt quite the wits.

(I, i, 25—27)

と当時広く読まれた De la Primaudaye の書の考えに同鳴し

Dum. ....

The grosser manner of these world's delights  
He throws upon the gross world's baser slaves:  
(I, i, 29—30)

と “villany” を卑しき奴隷と云うのである。

“villany” の立場を取つた Berowne も遂に王に一応屈服して、

Ber. ....

And though I have for barbarism spoke more  
Than for that angel knowledge you can say,  
Yet confident I'll keep what I have sworn  
And bide the penance of each three years' day.

(I, i, 112—115)

と王達と研究に専念することになる。併しなほも、

Ber. So study evermore is overshot:

While it doth study to have what it would,  
It doth forget to do the thing it should,  
And when it hath the thing it hunteth most,  
'Tis won as towns with fire; so won, so lost.

(I, i, 141—145)

と研究即ち此處で意味する that exaggerated habit of studious industry は the wholesome work of everyday life を無視し、なほざりにするものであり、不必要な義務を自らに課して人間としてなすべき義務を怠るものだとして批判を続ける。其故に、

Ber. Necessity will make us all forsworn

Three thousand times within these three years'  
space;

For every man with his affects is born,  
Not by might master'd, but by special grace.

(I, i, 148—151)

と予言をする。そしてこの予言が的中することは梗概に述べた通りである。

以上の様な Berowne の言葉に Shakespeare 自身の考えが相当地に表わされて居るのではないだろうか。Shakespeare 自身の考えは通常登場人物の言葉を以て直にそれを表わすものであると見做すことの危険なることはよく云われて居る所であるが、作品の筋の辿る経路には明瞭に彼の考えが表われていると考え得る。Berowne の言葉は筋の経路を前以つて表わしているから、彼の言葉に或程度 Shakespeare の思想が潜んで居ると考えても間違はなからう。然らば所謂 new learning や academic learning に対する諷刺を主なるテーマとするこの戯曲に何故に *Love's Labour's Lost* と云う題目をつけたのであろうか。この題目は通常日本では「恋の無駄骨折」とか「恋の骨折損」と云う意味に解されている。果してそれでよいであらうか。Navarr 王と三人の貴

族達はフランス王女とその三人の女官達とそれぞれ一年後には目出度く結婚と云うことになるのであろうし、又 Armado と Jaquenetta とは既に子供まで出来て、恋は凡て成功し、骨折損どころか大成功であることは既に梗概中で述べた通りである。それならば如何なる意味に解すべきであらうか。

当時の大学者で Montaigne の *Essays* の翻譯者であつた Florio の著作、*First Fruits* に、  
We need not speak so much of loue, al books are ful of loue, with so many authors, that it were labour lost to speak of Loue.

とあり、其趣より Shakespeare が *Love's Labour's Lost* と云う表題を取つたのだと F. A. Yates が述べて居る。其故に「恋を語るは無駄な骨折り」と云う意味より「恋に骨折るは無駄なこと」と云う意味に解される。即ち new learning には恋の骨折は無用であると云う意味であらう。かく解すれば、この表題は學問に従事する当時の一派の人々の態度——気取つた pedantic affectation——を諷する意味を持つた言葉をこの作品の題目としたことになり、しつくりすると思われる。

Shakespeare は Berowne を代表とする “Villany” の思想に全面的に賛成していただろうか。Eliot や Nashe は人生の直接経験を重んじ、特に恋愛を最高の學問と考えたらしい。少くともこの戯曲に現われる人物達は禁慾的生活を営んで學問をする態度から豹変して romantic な恋愛至上主義へと極端に変わる。Berowne がこの考えの先頭に立つ。そして、

Ber. Sweet lords, sweet lovers, O! let us embrace.

As true we are as flesh and blood can be:

The sea will ebb and flow, heaven show his  
face;

Young blood doth not obey an old decree:

We cannot cross the cause why we were born;

(IV, iii, 211—215)

と云つて、人間発生の原因たる恋愛に抵抗することの不可能を説き、更に、

Ber. ....

A wither'd hermit, five-score winters worn,

Might shake off fifty, looking in her eye:

Beauty doth varnish age, as if new-born,

And gives the crutch the cradle's infancy

O! 'tis the sun that maketh all things shine.

(IV, iii, 239—243)

と恋人の美しさの偉大な力を説く。王及び紳士達は恋の sonnet を盛に作つて恋人に渡す。Berowne は恋愛諷刺の長台詞を誇張に満ちた言葉でやり、次の様に云う。

*Ber.* .....

Have at you then, affection's men-at-arms;  
Consider what you first did swear unto,  
To fast, to study, and to see no woman;  
Flat treason 'gainst the kingly state of youth.  
Say, can you fast? your stomachs are too young,  
And abstinence engenders maladies.  
[And where that you have vow'd to study, lords,  
In that each of you have forsworn his book,  
Can you still dream and pore and thereon look?  
For when would you, my lord, or you, or you,  
Have found the ground of study's excellence  
Without the beauty of a woman's face?  
From women's eyes this doctrine I derive:  
They are the ground, the books, the academes,  
From whence doth spring the true Promethean  
fire.

Why, universal plodding poisons up  
The nimble spirits in the arteries,  
As motion and long-during action tires  
The sinewy vigour of the traveller.  
Now, for not looking on a woman's face,  
You have in that forsworn the use of eyes,  
And study too, the causer of your vow;  
For where is any author in the world  
Teaches such beauty as a woman's eye?  
Learning is but an adjunct to ourself,  
And where we are our learning likewise is:  
Then when ourselves we see in ladies' eyes,  
Do we not likewise see our learning there? ]  
O! we have made a vow to study, lords,  
And in that vow we have forsworn our books:  
For when would you, my liege, or you, or you,  
In leaden contemplation have found out  
Such fiery numbers as the prompting eyes  
Of beauty's tutors have enrich'd you with?  
Other slow arts entirely keep the brain,  
And therefore, finding barren practisers,  
Scarce show a harvest of their heavy toil;  
But love, first learned in a lady's eyes,

Lives not alone immured in the brain,  
But, with the motion of all elements,  
Courses as swift as thought in every power,  
And gives to every power a double power,  
Above their functions and their offices.  
It adds a precious seeing to the eye;  
A lover's eyes will gaze an eagle blind;  
A lover's ear will hear the lowest sound,  
When the suspicious head of theft is stopp'd:  
Love's feeling is more soft and sensible  
Than are the tender horns of cockled snails:  
Love's tongue proves dainty Bacchus gross in  
taste.

For valour, is not Love a Hercules,  
Still climbing trees in the Hesperides?  
Subtle as Sphinx; as sweet and musical  
As bright Apollo's lute, strung with his hair;  
And when Love speaks, the voice of all the gods  
Make heaven drowsy with the harmony.  
Never durst poet touch a pen to write  
Until his ink were temper'd with Love's sighs;  
O! then his lines would ravish savage ears,  
And plant in tyrants mild humility.  
From women's eyes this doctrine I derive;  
They sparkle still the right Promethean fire;  
They are the books, the arts, the academes,  
That show, contain; and nourish all the world;  
Else none at all in aught proves excellent.  
Then fools you were these women to forswear,  
Or, keeping what is sworn, you will prove fools.  
For wisdom's sake, a word that all men love,  
Or for love's sake, a word that loves all men,  
Or for men's sake, the authors of these women,  
Or women's sake, by whom we men are men,  
Let us once lose our oaths to find ourselves,  
Or else we lose ourselves to keep our oaths.  
It is religion to be thus forsworn;  
For charity itself fulfils the law;  
And who can sever love from charity?

(IV, iii, 287—362)

以上の言葉で知る通り、学問は人生の実際経験の中にこそ求むべきであり、恋愛が実際経験の中では最高なるものである故、恋愛こそ最高の本であり、最高の学問で





the death of a deer marked by an excess of the alliteration which was being rapidly discarded by Elizabethan poets, and he devises a masque for the entertainment of the Princess which is ludicrously inappropriate for a courtly show. His self-complacency is heightened by the flattery of the ignorant curate, who is lost in admiration of the pedant's 'rare talent' and praises for God for the presence in his parish of such a master. Holofernes is a portrait drawn once for all of the perennial Pedant. The fashion of his speech has changed, but the spirit remains the same, that of the plodder, blind to life around him and content to win 'base authority from others' books.'<sup>(25)</sup>

次に Don Adriano de Armado, a fantastical Spaniard を考えなければならない。この人物も当時の英国に在在した外国人と解さねばならない。当時の英国人が文化的に先進していた Italy や Spain を見る眼は吾々日本人が米国や英国を現在眺める見方に略々近い所があつたと思われる。renaissance 発祥の地である Italy や、これを早く取り入れた Spain を、renaissance 文化を吸収しようとして眼が外に向つていた当時の英国人は或程度の敬意を以つて眺めていたであらう。其故にその様な国々から来た人達を、吾々日本人の一部の人々が外国人や二世や洋行帰りの者を尊敬する様に、敬意を以つて見たであらう。彼等外国人或は外国通の一部には頭の空虚な癖になかなかの法螺吹きや氣取屋が居つたことであらう。Shakespeare はそうした連中の誰を Armado というこの劇の人物に依つて諷刺したかは学者の幾多の研究にも拘わらず未だ確定して居ないことは E. K. Chambers からの引用に依つて前に述べた通りである。Shakespeare はこの法螺吹き (braggart) の Armado と云う人物を当時の英国で人気のあつたイタリア劇 *com-media dell' arte* より此の *Love's Labour's Lost* に取り入れたと云われている。併しこの人物はその原型の館を失つて、エリザベス朝時代の誇大な無法な言葉の濫用癖に対する諷刺的となつてゐる。この人物は王の言葉に依ると、

King. ...Our court, you know, is haunted  
With a refined traveller of Spain;  
A man in all the world's new fashion planted,  
That hath a mint of phrases in his brain;  
One who the music of his own vain tongue

Doth ravish like enchanting harmony;  
A man of complements, whom right and wrong  
Have chose as umpire of their mutiny:  
This child of fancy, that Armado hight,  
For interim to our studies shall relate  
In high-born words the worth of many a knight  
From tawny Spain, lost in the world's debate.  
How you delight, my lords, I know not, I;  
But I protest I love to hear him lie,  
And I will use him for my minstrelsy.

(I, i, 161—175)

と云う様な性格を持つて居り、簡単に云うと、

Ber. Armado is a most illustrious wight,

A man of fire-new words, fashion's own knight,...

(I, i, 176—177)

であり、一口に云うと、王女の云う、A' speaks not like a man of God's making (V, ii, 523) であり、Berowne の云う braggart (V, i, 536) であり、Armado 自身の a soldier, a man of travel, that hath seen the world (V, i, 102—3) である。彼は pedant の Holofernes に、

Arm. [To Hol.] Monsieur, are you not lettered?

(V, i, 45)

と尋ねる様な自尊心の強い男である。この男の言葉の特徴については省略するが、この法螺吹き男はその頭脳相当の相手である田舎娘の Jaquenetta と極めて romantic な love をし、その挙句には Nine Worthies の pageant の最中に場所も辨えず阿呆者の Costard と Jaquenetta のことで決闘をやることになるが、シャツがなくて遂に挑戦に応ずることが出来なかつたことなどについては既にこの戯曲の梗概で述べた通りである。

Armado は自ら称して a soldier, a man of travel, that hath seen the world と云つて居ることは既に述べた通りであるが、当時この様に外国通の旅行者はどの様に考えられていたであらうか。John Dover Wilson の編集したエリザベス朝の散文集<sup>(26)</sup>にある Francis Bacon の Essays に依れば、旅行は若者の教育の一部と考えられ、又年輩者には人生経験の一部と見做されていたのである。其故に旅行者は人生経験に富み、学問のある人と見られていたのである。それで Armado も一種の pedantic affectation、如何にも学問教養のある人間と自認し、それを衒つた氣障な人物である。こう云う人物に対してもやはり教師に対すると同様に Shakespeare

は謙遜と侮蔑を感じて諷刺の矢を向けたものと思われる。併しこれは前に述べた通り英国のエリザベス朝時代のことだけではなく、現在の英国の何処か場末の町あたりにも見られれば日本にも居るものと思われる。洋行すれば偉くなると考える徒輩が多く、猶も杓子も（但し学者を除く）海外旅行を望み、所謂「ハク」をつけようとする日本人の多い現状を見る時それが了解出来ると思う。其故に Armado の様な人物も亦こうした人間性の何れの時代にも何れの国にも通ずる姿を捉えて Shakespeare がその様な傾向の強い人間を諷刺したものと結局考えても差支えない様である。

## V

Shakespeare の *Love's Labour's Lost* の興味の中心をこの作品が含む彼の自画像的要素、巧妙なる言葉の駆使の技術、諷刺に求めたことは前述の通りである。併し言葉に対する興味は学者には大なるものであろうが一般人に対しては巧妙であるだけに却つて難解さを来たして興味を減ずる結果を招来しているようである。然るに諷刺に対する興味は益々深くなつて行くようである。それはこの時代の背景が学者の研究に依り益々明らかになつて来、又この劇中の人物の topical allusions が誰々であつたかという興味も手伝うからであらう。

その諷刺の矢が学問と pedantry に向けられて居るこの戯曲は Walter Raleigh をして云わしむれば、<sup>(28)</sup>  
*Love's Labour's Lost* is a carnival of pedantry. である。この術学者的態度は王及び紳士達が最初に学問研究を企てた時は初期 Renaissance の樂觀主義の特徴を示し、又 Copernicus 的新興の自然科学的特色を表わし、彼等が悉に随つてからは 'villany', romanticism, 旧来の Optimistic theory を奉ずる者達の特徴など色々と表わし、ロシア人の仮装をした劇の直後に Berowne が虚飾をすてた態度は正しくは pedantry とは云えないかも知れないが、これまた pastoral 的な一種の pedantry を表わしているとも考えられる。更に Schoolmaster の Holofernes, 自ら旅行者と称する a fantastical Spaniard はそれぞれの pedantry を表わしている。此等は皆 Shakespeare と同時代の人々の取つた術学的態度であつたのであらう。

併しこれらの pedantry 及び学問に対する Shakespeare の諷刺は topical なものではあるが、時代と共に消え去るものではなく、現在もお生きているのである。それは人間性の中に根強く存在する異常性、矛盾性、愚鈍

性を其等の topical な諷刺が深く突いて居るからであらう。T. M. Parrot は、

What Shakespeare aimed at in *Love's Labour's Lost* was something deeper and more permanent than contemporary 'School of Night'; it was the whole body of pedantry, affectation, and formal control of life, which flew in the face of nature. This tendency was, perhaps, especially dangerous in Shakespeare's day when enthusiasm for the newly discovered classics was degenerating into blind pedantry and the new delight in the exploitation of language was blossoming into fantastic affectation. Yet it is not unknown in our time, when academic formalism insists upon a doctor's degree as a *sine qua non* for a post in a college faculty. In our day, too, the passion for novelty of expression is no doubt, one of the reasons why modern poets indulge in a preciosity of speech unintelligible to the common reader.<sup>(29)</sup>

とやはり Shakespeare の諷刺の永久性と普遍性とを实例を挙げて説明している。

併しこうした人間性の永久に持つ一面が投ずるクロテスクな影に向けられた諷刺に作品の持つ生命の存在理由を求めらば、その作品は厭世的人間嫌味を帯びなければならぬことは既に述べた通りである。然るにこの作品にはそれがない。此処にこの作品の持つ諷刺の特徴を吾々は見る。然らば人間性のこうした影に向けられながら而も明るく人間嫌いの気味のないこの作品の諷刺は如何なる諷刺なのであらうか。吾々は John Palmer の説に耳を傾けなければならぬ。

Shakespeare will so easily lose the satirical purpose with which he started, and so often provoke us to wonder whether he is ridiculing excess in his characters or sharing their intoxication.<sup>(30)</sup>

In the conduct of plot and character the author keeps his wonted mean between sympathy and satire.<sup>(32)</sup>

と彼が云う様に、最初は知性的に人間の特つ愚行を頗く諷刺に出発するが終りはその愚行に同情をよせていることに依る。それは梗概に示した通り王、紳士達及び Armado の求婚の一応の成功や Holofernes に対する王女の言葉などにもよく表われている。即ち同情と諷刺との中間を保つていのである。然らばこの温い笑を唆る諷刺と同情との中間性は何故に惹起されるのであらうか。Shake-



Shakespeare は現実から遊離した不健全な学問や、如何なる学問に従事しようが不自然な一切の虚飾や術学的態度に対しては非常なる嫌悪を感じた。そうした学問や態度を持つ具体的な現実の人々を凝視して其処より創作のスタートを切る。併しそうした現実の事象や人物に彼は決して捉われなかつた。自由に想像力を働かせて作品の人物や筋や言葉を創作して行つた。そして創造された人物はさながら活きた人物の如くに作品に於て活動する。そこに吾々は彼の作品の持つ時代性と永久性普遍性の理由を見出すことが出来る。併し彼はこうした作中に活きる人物の愚行に諷刺を投げかけるだけに止つたのではない。「真夏の夜の夢」にある Puck が "What fools these mortals be". (III, ii, 115) と云つた時の気持ちが働くのである。より高き所より袖の様な心を以つて人物の愚行に対して興味と同時に愛憎や同情を感じたのである。そしてその気持ちを作品に滲透させているのである。この様に考えると、この作品の持つ諷刺の時代性、永久性、普遍性と共にその明朗性や温かさの説明が出来、その諷刺が特殊から一般の諷刺へと変貌している理由も説明がつくと思われる。其故にこの作品の諷刺の対象となつてゐる学問は如何なる種類の学問であつたか、その人物は誰々であつたかと云うような研究を厳密に明確に行おうとしても自由なる Shakespeare の想像力に依る作品なるが故に永久に不可能であり徒勞に帰する結果になることは明瞭であらう。

この作品の諷刺の特徴及びその対象に就いて以上の説明が果して真理であるならば、Shakespeare が諷刺の矢を放つために取つてゐる立場はいかなるものであつたのであろうか。それは nature と人生の reality とを重んずる立場と云うことが出来る。この立場に立つ時は不自然さや人間性に即しない学問を嫌い、気取りや術学的態度を憎み、健全さ、素朴さ、率直さ、或は事実や實際や良知を重んずるであらう。こういう立場を取る人は人生の眞の本質を変化する事象の中に理解せんとする真面目な探究的な精神の人間である。人生とはこの劇の終りに歌われている春（郭公鳥）と冬（梟）の両者よりなるが、この両者を貫く原理と実体を掴もうとする人である。この様な立場の人は人生の眞価から遊離した学問に従事することは愚行と見做すのである。否寧ろ人間に有害であると見るであらう。

Bacon, with his face turned towards the future and the new world which was to spring from the new scientific learning, Shakespeare doubted lest

the new kind of learning, dealing no longer with divine and human values, might loosen the social bonds which unite mankind. ....

Perhaps something of this was already visible to one whose eye could pierce to "the prophetic soul of the wide world, dreaming on things to come".

と F. A. Yates は云つて居るが、人生の眞実や価値から離れた極端な観念的な学問や科学などが有害なことは吾々の現に目撃する所であるが、Shakespeare が諷刺の筆を加えた近代科学が遂に現在に至つて水素爆弾までも作り出し、科学が遂に人間を支配し悩ます至つて了つた20世紀の現状を彼がもし生きて居て見たらは何と云うだろうか。この人類の一大愚行にどの様な諷刺を飛ばすことだろうか。又それを誇りとし、氣取る人間達に向つては何と云うだろうか。

(1954. 9. 5)

#### 参考及び引用文献

作品よりの引用は The Arden Edition の Richard David 編の Love's Labour's Lost に依る。

- (1) Stephen Gwynn: The Masters of English Literature, pp. 48—49.
- (2) T. M. Parrot: Shakespearean Comedy, p. 120.
- (3) M. C. Bradbrook: Shakespeare and Elizabethan Poetry, p. 212.
- (4) F. A. Yates: A Study of Love's Labour's Lost, p. 162.
- (5) F. E. Halliday: Shakespeare and His Critics, pp. 355—361.
- (6) The Henry Irving Shakespeare, Vol. 1, LLL. Intr. pp. 4—5.
- (7) T. M. Parrot: Shakespearean Comedy pp. 124—125.
- (8) 斎藤勇著：シェイクスピア研究, 105頁.
- (9) Cazamian and Gwynn: A History of English Literature, pp. 412—413.
- (10) Allardyce Nicoll: Shakespeare, p. 20.
- (11) B. Ifor Evans: The Language of Shakespeare's Plays, p. 1.
- (12) Moulton: The Modern Study of Literature, pp. 360—361.
- (13) Lytton Strachy: Elizabeth and Essex, p. 9.
- (14) Edward Dowden: Shakespeare, A Critical

- Study of His Mind and Art, pp. 62—63
- (15) Richard David: Love's Labour's Lost, Intr. pp. XIII—XIV
- (16) Theodore Spencer: Shakespeare the Nature of Man, pp. 17—18.
- (17) E.M.W. Tillyard: The Elizabethan World Picture, p. 52.
- (18) Shakespeare's England, Vol. 1, pp. 246—248.
- (19) F.A. Yates: A Study of Love's Labour's Lost, p. 75.
- (20) *ibid.* p. 77.
- (21) *ibid.* pp. 34—35.
- (22) E. C. Pettet: Shakespeare and the Romance Tradition, p. 105.
- (23) F.A. Yates: A Study of Love's Labour's Lost, p. 17.
- (24) E. K. Chambers: William Shakespeare, vol. 1, p. 336.
- (25) T. M. Parrot: Shakespearean Comedy, p. 124.
- (26) John Dover Wilson: Life in Shakespeare's England, pp. 67—69.
- (27) M.C. Bradbrook: Shakespeare and Elizabethan Poetry, p. 218.
- (28) Walter Raleigh: Shakespeare, p. 39.
- (29) Theodore Spencer: Shakespeare and the Nature of Man, p. 86.
- (30) T. M. Parrot: Shakespearean Comedy, p. 121.
- (31) John Palmer: Comic Characters of Shakespeare, p. 4.
- (32) *ibid.* p. 15.
- (33) F.A. Yates: A Study of Love's Labour's Lost, p. 202.
-